

第百八話 挺身ではない挺進部隊（「身」ではなく、「進」）

テイシintaiと云えば、某国が従軍慰安婦=女子挺身隊と悪意ある誤解を取らせてしていることを思い出すが、本話のテイシintaiは、大東亜戦争末期に帝国海軍が編成した海上挺進部隊と帝国陸軍の陸軍海上挺進戦隊について述べる。

1 海上挺進部隊(KTB)

海上挺進部隊は、連合艦隊（海軍総隊）によって1945(S20)年5月20日に編成(司令官は少将)された、日本海軍の組織的行動が可能な水上艦部隊である。第三十一戦隊と第十一水雷戦隊を束ねた軍隊区分である。

大型艦艇が相次いで撃沈、大破、燃料不足等で航行不能となっていた状態の中、間近に迫っていた本土決戦に向けて編成された。主任務は邀撃奇襲作戦と輸送作戦であった。連合軍の本土上陸作戦が開始された場合は、決号作戦において上陸中のアメリカ軍を奇襲攻撃する。しかし、戦隊は燃料不足の為に合同で訓練を行なうこともできず、呉港あるいは柳井付近の擬装泊地に繋留したまま、已むなく停泊訓練を行なうのみであった。日本の降伏により、海上挺進部隊が出撃する機会は無かった。

決号作戦時の攻撃方法は、母艦搭載した人間魚雷回天を発射することを第一義とした。回天発射後、搭載母艦自らも砲雷撃を加えることとされていた。作戦要領としては主として夜戦によるものとし、内海西部の祝島を中心とする行動半径180海里圏以内とされた。各駆逐艦は回天を1-2基、戦隊旗艦である駆逐艦花月と戦隊中最大の艦であった軽巡洋艦北上は8基を搭載し、できるだけ来攻敵部隊に近接して回天を発進させたのち、上記の通り挺進部隊は主として敵輸送船団に砲雷撃を加えることとされた。

2 陸軍海上挺進戦隊

大東亜戦争中に日本陸軍が編成した特攻艇部隊である。水上挺進隊と呼ばれることもある。小型戦闘舟艇である四式肉薄攻撃艇（マルレ：連絡艇の頭文字レに○の秘匿名称）を装備した。マルレは、当初は搭載した爆雷を投下して攻撃する計画だったが、実際には、しばしば体当たりする特攻兵器として実戦に投入された。

1944年（昭和19年）7月16日に、陸軍内で海上特攻研究班が設置され、マルレ艇による攻撃部隊の研究が始まった。そして、同年8月に小豆島船舶幹部候補生隊で海上挺進第1-10戦隊が仮編成され、さっそく訓練に着手した。これら10個戦隊は、同年9月1日以降に広島県の江田島幸の浦で編成完了した。

爾後逐次に戦隊が編成され、第41-53戦隊も編成が進められたが、第51戦隊と第52戦隊が完了したのを除き、仮編成されての訓練途上で終戦を迎えた。

1個戦隊は本部と3個中隊（各マルレ30隻）から成り、中隊は本部と3個群（各マルレ9隻）から成っていた。1個戦隊の兵力は、戦隊長以下隊員104名とマルレ100隻、自衛兵器として短機関銃4挺と拳銃を保有した。人員は、陸軍士官学校第51-54期出身の少佐・大尉を戦隊長とし、中隊長は陸士57期の中尉・少尉が中心、群長（小隊長）以下の幹部は学徒出陣の船舶幹部候補生や陸軍予備士官学校出身者などが充てられた。一般隊員は未成年で志願した船舶特別幹部候補生であった。幹部を含め16-25歳程度の若い将兵だけで構成された。

編成された部隊のうち第30戦隊まではフィリピンや沖縄、台湾などに配備された。ルソン島の戦いや沖縄戦では実戦に参加した。マルレを消耗した後は、陸上戦闘に協力した。後半に編成された第31戦隊以降は訓練完了次第、本土決戦に備えて日本各地に展開した。もともと日本陸軍は、上陸用舟艇の大発や特殊船と称する揚陸艦など、艦船部隊を豊富に有していた。このように海へ深くかかわった日本陸軍であったからこそ、通常なら海軍が所管するような突撃艇部隊を編成できたと考えられる。